

宮城学院女子大学学芸学部日本文学科2014年度教育実践報告

参加・体験型学習を取り入れた伝統文化教育プログラムの研究

深 澤 昌 夫

はじめに

本学学芸学部日本文学科では2014年度宮城学院女子大学特別研究助成・教育推進研究費の助成を得て「参加・体験型学習を取り入れた伝統文化教育プログラム」を実施した。本プログラムに関する簡略な報告書はすでに大学ウェブサイトに掲載済みだが、本稿は実施に至る経緯や背景、基本的な考え方、また実施後の参加者へのアンケート調査等を含む詳細な教育実践報告である。

1. これまでの経緯と背景

(1) 日本文学科の取り組み

日本文学科では1999年に大学・短大設置50周年記念行事として「歌舞伎を10倍楽しむ方法」を実施して以来、折に触れて日本の伝統文化をテーマとする参加・体験型イベントを開催してきた。

1999年「歌舞伎を10倍楽しむ方法」(10・21、大学講堂、協力：舞台創造研究所、出演：中村小山三ほか中村屋一門)

2001年「平安朝を“着る”」(10・31、大学講堂、協力：有職文化研究所)

2003年「狂言でござる」(6・3、大学講堂、協力：万作の会、出演：石田幸雄ほか和泉流野村家一門)

2004年「歌舞伎ワークショップ～お江戸でござる」(11・18、大学講堂、協力：舞台創造研究所、出演：花柳貴答ほか)

2009年「平家物語～語り芝居と琵琶による」(11・12、大学講堂、協力：まほろばの会、出演：岡橋和彦・岩佐鶴丈ほか)

2010年「にちぶん東方落語寄席」(11・11、大学講堂、出演：川野目亭南天ほか)

2012年「『源氏物語』を着る～平安装束着衣実演講座」(10・31、大学講

堂、協力：畠山大二郎)

2013年「万葉びとになる～天平装束着衣実演講座」(5・25、大学講堂、
協力：上野誠)

上記のような参加・体験型のイベントは、学問の性質上どうしても「座学」のイメージが強い日本文学科にあって特筆すべき主要な取り組みの一つだが、学科の在籍者全員を対象とする大がかりな企画でもあり、多額の予算と多大な労力(数年先を見越した出演交渉等を含む)を必要とするため、必ずしも毎年開催できるわけではない。

他方、正課の通常カリキュラムでは、筆者が担当する2年次専門科目「日本文化史」において、多くの学生が能・狂言、歌舞伎、文楽等、日本が世界に誇る三大古典芸能を中心に、その歴史と現在を通時的、体系的に学んでいる。また、同じく2年次の「身体表現研究」でも歌舞伎の「外郎売」や「白浪五人男」、あるいは狂言の「蝸牛」「柿山伏」などを独自に教材化(台本化)、必ずしも古典としての型や演出にとらわれず、学生たちの自由な発想・創意・工夫・アイデアによってこれらに挑戦する取り組みを行なっている。

「日本文化史」は現在選択科目だが、例年対象学年の8割前後(およそ90～100名程度)が履修する、比較的人数の多い科目である。^{*1}受講者の大半は能や歌舞伎について「日本史」「国語」あるいは「音楽」等、これまで受けてきた中等教育の範囲で一通り習ってきているはずで、少なくとも「能」「歌舞伎」「文楽」といった「ことば」は最低限知っている。だが、知っているのは「名前」だけであって、実際に観たことがある者は少ない。というより、ほとんどいない。全く「知識」がないわけではないが、それがどのようなものか、たいていの学生は実際に見たことも聞いたこともない。ごくまれに高校時代に「見たことがある」という学生がいても、それはほとんど何の準備もなく「見せられた」のであって、ただたんに「見た」というにとどまる。

要するに、幼少期から大学まで「学校」が生活のほとんどを占めている若年世代にとっては、日本の伝統文化に対して「知識」(教科書の「ことば」、試験のために暗記を要求される「ことば)以外の接点がほとんどない、というのが現状であり、この点については全国各地、地域差はないと思われる。

それでいて、あるいはそれゆえに、若年世代ほど伝統的なもの、歴史的なもの、古典的なものを「難しい」「堅苦しい」「年寄りの好むもの」とみなし、

自分たちには「わからない」「関係ない」「過去の遺物」として、あらかじめブロックしてしまう傾向がある。

事は日本文学科の学生たちであっても同様であり、日本文学科を選んだからと言って、皆が皆、必ずしも古典が好きなわけでも得意なわけでもない。むしろ古文や日本史（歴史）に対してある種の先入観や苦手意識を抱いて進学してくる学生のほうが多い。それはおそらく、教科としての「古文」や「日本史」が「考える力」を要求される科目ではなく、どちらかといえば「暗記科目」と思われているからであろう。

にもかかわらず、日本文学科では例年一定数、それめかなり多くの学生が「日本文化史」を受講する。受講の動機・理由は様々だろうが（単位、時間割、内容、教員…等々）、筆者にとっても、学生たちにとっても、また学びの対象である伝統文化の側にとっても、これはたいへん貴重な「出会い」であり、大きなチャンスである。

（２）「日本文化史」の取り組みと講義の組み立て および 学習過程に関する基本的な考え方

筆者はこれまで、日本文学科の学生たちに古典文学や伝統文化の豊かさや奥深さ、あるいは古典の持っている「新しさ」に気付いてもらいたいとの思いから、毎回回収されるレスポンスカードや学期末・学年末の感想等をもとに、講義・演習・実習等、担当科目において様々な工夫を凝らしてきた。

「身体表現研究」における古典の教材化もその一つである。同科目はしかし実習科目であるところから、知識の習得を主たる目標としたような、いわゆる「お勉強」はさておき、まずは身をもって演じる（聞き慣れない「他者」の言葉＝古語・古文・芸能の言葉に身を委ねてみる）ことによって、ダイレクトに「古典に親しむ」というアプローチをとっている。

これに対して、大学らしい「知的な学び」「専門的な学び」を担うのが講義科目の「日本文化史」である。だがこれも、知識の習得や理解を目標にしつつ、ただたんに教科書を読むような（あるいは教科書を読めばわかるような）、いわば「ことばでことばを説明する」辞書的な授業ではなく（むしろそういう「解説」的な作業も時には必要だが、必ずしもそれだけでなく）、実際に対象を見て、聴いて、可能な限り五感で感じることによって学生たちが自ら「先入観の壁」に気付き、これを乗り越え、新たな視界を獲得できる

よう、毎年授業内容や授業方法の見直しを行なってきた。

ここにいう「先入観の壁」は、必ずしも「誤解」ではないが、対象をよく知らないままにあらかじめ強固に築かれてしまった目に見えない「壁」である。はっきりと目に見える形で意識的に「教えた／教わった」ものでない、無意識のうちに刷り込まれたものを打破するのは、誰であれ容易なことではない。むしろ、人生経験も少なく、学びのフィールドも、世代間交流の機会も限られている若年世代ほど「先入観の壁」に囚われやすいところがある。よく年をとると頭が固くなるというが、年が若いから考え方も柔軟だ、とは一概に言えないのである。

そこで筆者は、伝統文化を一種の「異文化」と捉える。日本の伝統文化だからといって、「分かって当たり前」「知っているのが当然」という前提に立たない。学生たちに（あるいは一般社会人も含めて）「わからない」「関係ない」「過去の遺物」と思われているような歴史や伝統文化について学ぶことは、もはや一種の「異文化理解」である。むしろそうしたアプローチを取ることによって、伝統文化も新たな照明のもとで輝きを取り戻すのではないかと考える。

上記のような立場に立った時、先に述べたような「先入観の壁」を突破する有力なツールとなりうるのは、トピックス（講義内容）の具体例としての画像・映像・視聴覚資料である。

これはどのような分野にも言えることかと思うが、一番いいのはやはり「具体」に触れること、そしてできれば「本物」に触れることである。とりわけ「本物」の持つ力は人の心を動かす。心が動けば自ずと興味・関心を持ち、自ら学ぼうという姿勢が生まれてくる。とはいえ、毎回「本物」を扱うこと（見たり聴いたり、直に話を聞くこと）は困難なので、ふだんは視聴覚資料を用いて授業を構成することになる。だが、それでも、そういうものすら見たことがない学生たちにとっては、すべてが「未知との遭遇」であり、毎日が発見の連続である。ある学生の言葉を借りれば「毎回目からウロコの連続で、もう目から他のものが出てきそう」*²なほど「驚きと感動」に満ちた日々の学習活動があって、その延長線上に「生の舞台」を持ってくる。そこが重要である。

かつて、仙台で学生たちが毎年手軽な料金で見ることのできる古典芸能の「本物」は、宮城県民会館で上演される「公文協歌舞伎」*³だけだった。そ

れが近年では、文楽も隔年から毎年の開催になり（於電力ホール）、能・狂言も5月の仙台青葉能（於電力ホール）以外に市民会館や青年文化センター、あるいは2011年に出来た若林区卸町の能・BOXなど、方々の会場で年に何度も上演されるようになった。

以前に比べたら、仙台における古典芸能上演／観劇環境は各段に充実し、豊かになったと言ってよい。とはいえ学生たちは、あるいは学生に限らず、そもそもそういうものに興味を持たない人たちは、誰かに誘われたとか、出演者に興味があるとか、何らかの理由・きっかけ・動機がなければ、どんなに近くで公演が行われようが、どんなに料金が安かろうが、わざわざ観に行ったりはしない。だからこそ「日本文化史」では、希望者（受講者の自由意志）ではなく、原則受講者全員を講義の一環として観劇に連れ出すことにしている。^{*4}

この「講義の一環として」というのがまた大事なところで、普通なら主体性や自発性を欠いたネガティブな「やらされ感」（「～させられる」「～させられている」という“被・使役”感）によって学びの意欲が減退しそうところだが、「日本文化史」では、学生たちは口々に、これまで関心はあっても自分から足を運ぶ「勇氣」のなかった古典芸能の舞台に「講義の一環として」行けてよかったと述べている。つまりここでは、「講義の一環」であることが学生たちの背中を押すきっかけになっているのである。

なぜか。まず第一に、受講者たちが（非常に積極的な者から消極的な者までそれなりの幅はあるが）古典芸能にまったく興味がないわけではないからである。というより、そもそも興味のない者やお金を払ってまで観劇に行く気のない者は「日本文化史」を受講しないからである。第二に、あらかじめ講義を受け、その上で観劇することによって、「講義の一環としての観劇」に内容と実質が備わり、両者の間にきちんと相関性のあることが了解されているからである。

本物を「見る」ことはとても重要だし、それによって得るものも大きい。だがしかし、ただ「見せる」だけでは教育効果として十分とはいえない。そこには講義による入念な下地作りや観劇後のフォローやアフターケアが欠かせない。

能であれ、歌舞伎であれ、「日本文化史」で実際に舞台を観に行く場合、学生たちはすでにある程度古典芸能について学んでいる。その上で、当日

の具体的な演目やあらすじ、見どころ、出演者などについても事前にレクチャーを行う。映像資料がある場合は、そういうもの（舞台の一部あるいは独自に編集したダイジェスト版）をあらかじめ見せておく。また、観劇後は観劇後で、学生たちから様々な疑問・質問が出てくるので、それにしていねいに答える。受講生が実地でよりよく学ぶためには、あるいは劇場に行ってもよかった、観てもよかったと思うためには、こうした事前・事後指導は必要不可欠である。

これから観に行く舞台の映像をあらかじめ見せておくのは、学生たちに「安心感」を与えるためである。学生たちは生まれて初めての古典芸能観劇を楽しみにしつつ、同時に、見てもわからないのではないかと、理解できないのではないかと…という不安を抱えている。ファーストコンタクトにはいつもこうした不安がつきものである。だが、あらかじめ解説を施し、映像を視聴することでそうした不安が払拭されると、心理的なハードルがぐっと下がり、逆に期待感が高まっていく。

たとえば、2014年度秋の文楽公演に際し、その直前対策講座として『菅原伝授手習鑑』「寺子屋の段」を取り上げた。以下はその時（10月1日）の感想・コメントである。

- ・ダイジェストだけでも鳥肌が立ちました。
- ・初めてきちんと見ましたが、意外にも（笑）面白かった。金曜日が楽しみです！
- ・人形とは思えないほど表情豊かで驚きました。文楽、楽しみです。
- ・松王丸に感動しました。見るのが楽しみです。
- ・衣装、髪型、ひとつひとつに意味があるんですね。鑑賞のポイントを教えてください、実際に見るのが楽しみになりました。

こうしたコメントを読むと、大勢の学生が事前学習によって期待感を高めている様子がうかがえる。

もっとも、こうした事前学習を実施して映像などをあらかじめ見ている、それによって舞台を「初めて見る」ことの新鮮さや感動が損なわれることはない。なぜなら、映像と実物（生の舞台）はまったく別物、あるいは別次元の体験だからである。そして、事前に映像を見ながら解説を施しておくと、学生たちは筋（ストーリー）を追うことに汲々とせず、たとえば文楽であれば、ある時は舞台正面の人形を見たり、人形遣いを見たり、あるいは上

手床に座を占める太夫・三味線を見たり、またある時は近年地方公演にも導入された電光掲示板（G・マーク＝字幕）にも時々目を走らせたりしながら、より注意深く、より楽しく、舞台を見、また物語の世界に入り込むことができる。こうしてみると、生の舞台に接して得られる理解や共感、感動体験は、事前学習を含む一連の学習活動の成果であり、日々の学びの積み重ねというべきなのである。

以下、文楽観劇後の感想をいくつか紹介しておく。

- ・文楽、初めて見ましたが、想像以上に分かりやすく、楽しめました。人形も太夫も三味線もすごい迫力で、話の内容を知っているのに思わず涙が…
- ・人形浄瑠璃、面白かったです。絶対泣くもんか！とがんばっていたのに、松王丸が泣き出したときはこっちも泣いていました。
- ・ビデオではそこまで感じなかったのに、本物を見てとても感動しました。やはり本物を生で見るといのはすごいと思いました。
- ・文楽とてもよかったです。やっぱり内容が分かって、自分がその世界に入り込めるっていいですね。
- ・最初は黒衣が多くて気になりましたが、話が進むにつれ、そんなことが全く気にならなくなるほど入り込めました。

実をいうと、学生たちにとって一番認知度の低い古典芸能は文楽であった。一番「よく知らない」ものは、彼女たちにとって一番「遠い」存在だったはずなのである。だが、その文楽を実際に観て、初心者である自分たちでも「わかった」。それどころか「感動した（感動することができた）」「泣けた」というのは、当事者にとって予想をはるかに上回る「大発見」だったのではなからうか。

ついでながら、歌舞伎や能を見に行った時の感想も紹介しておこう。

- ・歌舞伎はビデオで見るより生で観る方がずっとおもしろかった。猿之助、中車がつくりあげる舞台は、笑える部分、思わず息をのむ部分、いろんな要素があって夢中になった。
- ・舞台は、映像で見ると、実際に見るとでは空気感が全く違うのだと感じました。
- ・初めての歌舞伎に感動しました。特に最後のシーン、茂兵衛（引用者注…市川中車こと香川照之の演じる長谷川伸『一本刀土俵入』の主人公駒

形茂兵衛)が舞台中央に立つ中、花びらが降ってくる所で泣きそうになりました。

- ・初めての能。やはり映像と生では、迫力がまるで違いました。引き込まれるような不思議な感覚でした。能面をつけると役者が消えてしまうような感覚も体感しました。またぜひ観に行きたいです。

学生たちが言うように、やはり「映像」と「生」は違うのである。そしてまた、本物に直に接する体験は、それが貴重・特別（非日常）なものであるだけに、普段の講義や映像資料ではとうてい届かないところ（心の深奥）にまで到達する力を持っていることがわかる。まさに「百聞は一見に如かず」である。

とはいうものの、学習・教育活動において、「百聞」（講義・知識・概念等）と「一见」（経験・体験・具体の直接知覚等）は、必ずしもその優劣を比べるべきものではない。まして二者択一はありえない。物の見え方は単なる視力の問題ではなく、物を見る「枠組み」に大きく左右される*⁵ということはよく知られた事実であり、必ずしも「見ればわかる」というような単純なことがらではない。現実にはある程度の知識がなければ見ても見えないし、わからない。わからなければ面白くない。そして面白くなければ理解しようとする意欲も低下する。したがって、「見る」ためには、あるいは「見て、わかる」ためには、ある程度の知識は必要不可欠なのである。

この点について、たとえば黒岩督と仲谷博視は二つの学習モデルを紹介している。*⁶

学習活動を活性化し、方向づけていく上で、学習課題に対する興味・関心・意欲などのいわゆる情意的要因の重要性は頻繁に指摘されている。その背景には、学習への興味・関心・意欲を喚起させることが、学習者の自主的・自発的学習活動を促し、知識の定着を強めるという考え方が認められる。習得すべき知識に対して学習者が興味・関心・意欲を持つような授業者の働きかけが、学習への動機づけを高め、その結果として有効な学習活動が展開され、知識が定着していくという考え方である。そこでは、学習のモデルとして「興味・関心・意欲（原因）→知識（結果）」の因果関係が想定されている。

これに対し、麻柄（1999）は「あることがわかると、そこからさまざまな疑問や興味・関心が生まれるし、意欲的な活動が始まる」として、

「知識（原因）→興味・関心・意欲（結果）」の因果モデルを提唱している。岩城（1998）も「知識の獲得が先行してこそ、学習内容に対する興味・関心・意欲が育まれる」と指摘し、学習内容に対する興味・関心・意欲を引き起こすには、知識の獲得が先行すべきであるという考え方を示している。

先述の通り、古典文学や古典芸能、あるいは時代的に相当隔たりのある歴史的な事項や地理的に遠い国々の話題など、学習者にとって時間的・空間的・心理的に「身近でない」ものほど、ある程度知識がないと「わかる」ようにならないし、わからなければつまらない思いをし、学ぶ意欲を失わせる可能性が高い。その意味において、麻柄・岩城・黒岩らが指摘するように、知識が学びに対する興味や関心を牽引する、とってよいのではないかと思われる。

だがしかし、「ことば」あるいは「知識」だけではどうてい不十分であり、机上の学問として「知っている」「聞いたことがある」というのは、たいてい「わかったつもり」になっていることが多く、それだけでは「先入観の壁」は破れない。むしろ、それじたいが新たな「先入観の壁」を作ってしまうことになりかねない。

「たんなる知識」とは、結局「他人の言葉」である。いつかどこかで誰かが作り出し、人づてに伝えられた「間接・伝聞の言語」である。教育現場でいえば、それは「教科書の言葉」であり、「試験のための言葉」である。そうした、断片的でよそよそしい「^{ひとごと}他人事（言）」に温かい血を通わせ、これを「自分のもの」にする（消化・吸収・統合する）ためには、どこかでその間接性を直接性に転化し、発展させる契機が必要になる。

昨今、教育現場において体験学習が重視されるのはそのためである。教室で学んできた事柄も、実際にその目を見て、聞いて、何かしら心が動かされて、はじめて「自分のもの」になる（そういう可能性が開ける）。断片的な「点」でしかなかった知識が「線」になり、「面」になる（知識の体系化と総合化、一つのまとまりをもった知識）。あるいは、自分と無縁・無関係だと思っていた過去や歴史やさまざまな営みが受講者自身の「いま」とつながる。それまで縁もゆかりもない「他人の言葉」でしかなかったものが「自分の言葉」に変わり、「他人」と「自分」がつながる。そうなっちはじめて、「知る」は「わかる」に発展し、その到達感や達成感のなかで知識のフレー

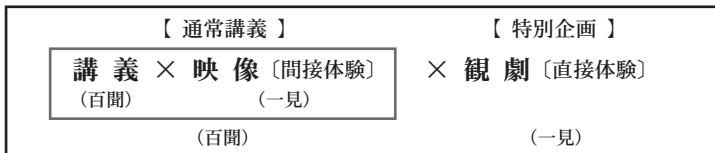
ムに変化が起き、新たな視野、新たな視界を獲得することができるようになる。体験学習にはそういった効果が期待されている。

そういう意味でも、「百聞」と「一見」からなる学習^{プログラム}過程は、どちらが重要というよりも、両者補いあうことによって教育効果が高まり、他人の言葉でしかなかった「たんなる知識」を自分のものにする（自分の言葉にする）ための有効な手立てであると考えられる。

- ・この講義で一番いいのは、机上で学んだことに関して実際の体験の場（観劇など）が与えられるところです。私は教師を目指しているので、実際に体験することの大切さ、そのための事前学習の大切さを実感しました。
- ・文化史を受講して、やはり百聞は一見に如かずだと思いました。授業でいくら知識を高めても、雰囲気や視覚的・聴覚的な感覚は分からないからです。しかしながら、知識もないと楽しめない、分からないということもこの授業で学びました。どちらが良い悪いではなく、両立させてこそ初めて知識が経験となって自分の中に吸収されていくのだと思いました。

さらにいえば、「百（聞）」と「一（見）」、この量的なバランスと先後関係もかなり重要なのではないと思われる。いまこれをつぶさに論証している暇はないが、長年の経験から言うと、教育的な効果としては「百聞」すなわち知識量が「一見」の実質（密度あるいは強度）に影響し、その価値を左右すると考えられる。

「日本文化史」は以上のような観点から、講義（聞くこと）と映像（見ること）、そして実際の観劇体験（体感すること）などによる相乗効果を狙った学習過程がデザインされている。これを図式化すると、



というようなかたちになる。

要するに、「日本文化史」では視聴覚資料を活用した日々の学びと、それぞれのジャンルごとに年に一度の特別な体験（観劇）とを適切に配置し、丁

寧な事前・事後指導を行うことで、学生自身が学びの成果を実感し（「わかる」という実感）、興味や関心、学ぶ意欲を高めていけるよう工夫されているのである。

2. 「日本文化史」の新たな取り組み

(1) 能楽師によるワークショップ型特別講義の導入

「日本文化史」では上記のような取り組みを一步進め、2012年度から観劇前のプレ企画としてプロの能楽師によるワークショップ形式の特別講義を実施している。仙台はもともと喜多流が盛んな土地柄で、講師としてお迎えした佐藤寛泰師も仙台藩ゆかりの能楽師の流れを汲む（喜多流職分・佐藤家の12代目）。能楽の普及活動を行っている仙台喜章会との御縁によって、このような特別講義が実現した。

佐藤師の特別講義では、たいへん貴重な装束や能面などをお持ちいただき、それらをどのようなプロセスで着付けていくか、能面をつけたらどうなるか、学生をモデルにしたかたちで解説・実演していただいている。また、佐藤師のご指導のもと、受講者全員で謡の稽古にも挑戦し、最後には会場からの様々な疑問・質問に答えていただくコーナーもある。1コマで実施する内容としてはかなり盛り沢山のプログラムである。

この特別講義は「日本文化史」の一環として行われているが、当日は受講者以外の一般学生も参加可能とし（学科・学年不問）、普通教室の中では比較的収容力のある階段教室（200人程度）を利用している。普通教室で実施するメリットとしては、大学講堂（1200人収容）で行ってきた学科企画とは異なり、参加者と舞台（教壇）の距離が近いということ。かつ、講師の年齢が学生と近いということもあって（佐藤師はまだ20代）、会場に親密感や一体感が感じられること。また、学生たちの疑問・質問・聞きたいこと（能楽師としての生い立ちや日常生活など、普段なかなか聞けないこと）をあらかじめリサーチしておいて講師に答えていただくコーナーもあるため、受講者が「自分たちも参加している」という実感を持ちやすいことがあげられる。

特別講義に関する受講者の感想を見ると、「能に対する知的な興味」と「能楽師という職業への興味」また「役者個人への興味」などが相まって、これから実際に能の公演を観に行くことへの不安感や抵抗感が薄れ、むしろ興味、楽しみ、期待感が高まっていることがわかる。

こうした特別講義を2年継続したあと、受講者の間から自分たちも実際に能を学んでみたい、体験してみたい、という意欲的な声が聞かれるようになった。これは、2012年の「能楽師による特別講義」導入以前には見られなかったことである。

たしかに、特別講義も「参加・体験型」企画ではあるが、謡の稽古はともかく、参加者全員あるいは希望者全員が実際に装束を身につけたり、面をかけたりにすることは現実問題として不可能。であるがゆえに、参加者を代表して一部の学生がこれを体験する、他の学生たちはそれを間近に眺める、そのようなかたちにならざるをえない。

学科で行なう大がかりな企画を含め、従来の「参加・体験型」イベントは、実はこのような「やって見せる（一部の学生が参加者を代表して皆に見せる）」スタイル、いわばデモンストレーション型、あるいは「間接（代行）体験」型が主流であった。だが、間近で本物に接する機会を得て以来、「観客」としてデモンストレーションを「見る」だけでなく、できることなら自分も体験してみたい、という声が年を追うごとに増えてきたのである。

そこで2014年度は、筆者が担当する「日本文化史」をベースにしつつ、全体を「参加・体験型学習を取り入れた伝統文化教育」としてデザインし直し、宮城学院女子大学の教育推進研究費の助成を得て、特に能楽を中心に、教育内容のさらなる充実および教育効果の促進を図ることとした。

(2) 2014年度「参加・体験型学習を取り入れた伝統文化教育プログラム」について

以下、2014年度のプログラムの概要を示す。

2014年度「参加・体験型学習を取り入れた伝統文化教育プログラム」

1. 通常授業「日本文化史」A・B（2年次、選択科目、前期15回・後期15回）
 担当：深澤昌夫
 概要：前期は中世芸能（能・狂言）、後期は近世芸能（文楽と歌舞伎）を中心に日本の伝統文化を学ぶ
 備考：科目登録者は前期88名、後期86名

2. 公文協主催「松竹大歌舞伎」仙台公演観劇（学外）
日時：2014年6月8日（日）17:00開演
場所：東京エレクトロンホール宮城（宮城県民会館）
出演：四代目市川猿之助、九代目市川中車（香川照之）ほか
演目：『一本刀土俵入』ほか
対象：全学年（「日本文化史」受講者およびその他の希望者）
備考：学生参加者は136名

3. 特別企画 第1弾「能を学ぶ」～能楽師による特別講義（学内）
日時：2014年6月11日（水）、4校時
講師：佐藤寛泰（喜多流能楽師）
概要：能面や装束の解説と学生モデルによる着付け実演、参加者による謡体験（謡曲『高砂』）
対象：全学年（「日本文化史」受講者およびその他の希望者）
備考：当日参加者は89名
（「日本文化史」履修者80名、その他日文5名、他学科4名）

4. 「人形浄瑠璃 文楽」仙台公演観劇（学外）
日時：2014年10月3日（金）18:30開演
場所：電力ホール
演目：『菅原伝授手習鑑』『寺子屋』ほか
対象：全学年（「日本文化史」受講者およびその他の希望者）
備考：学生参加者は97名

5. 特別企画 第2弾「能を観る」～喜多流「能への誘い」観劇（学外）
日時：2014年11月10日（月）18:00開演
場所：仙台市民会館
出演：佐藤寛泰ほか
演目：半能『八島』、仕舞『芦刈』ほか
対象：全学年（「日本文化史」受講者およびその他の希望者）
備考：学生参加者は94名

6. 特別企画 第3弾「能を体験する」～能の実技体験講座（学内）

日時：2015年2月16日（月）～18日（水）、3～4校時（計6コマ）

講師：佐藤寛泰

概要：能『唐船』の謡と仕舞を稽古し、能の基本（立ち方、座り方、歩き方、姿勢、発声、謡、所作、舞など）を学ぶ

対象：全学年（希望者）

備考：最終参加者は18名（3年生3名、2年生9名、1年生6名）

上記のうち、教育推進研究費の助成を得て実施したプログラムは、能を中心とした一連の特別企画、すなわち「能を学ぶ」（2014・6・11）、「能を観る」（2014・11・10）、「能を体験する」（2015・2・16～18）である。通常学期中に行われた「能を学ぶ」（前期）と「能を観る」（後期）は「日本文化史」全員参加企画とし、年度末に行われた「能を体験する」は希望者のみで実施した。

これらのプログラムが受講者の伝統文化に対する興味・関心、あるいは学びへの意欲をどの程度高めることができたのか、その効果を検証するために、全員参加企画と希望者参加企画に分けてアンケート調査を実施した。以下、その結果を示す。

3. 2014年度「参加・体験型学習を取り入れた伝統文化教育プログラム」に関するアンケート調査（2014・11・12実施）

(1) アンケート調査の結果

11月10日の「能への誘い」観劇直後、11月12日の「日本文化史」において全受講者を対象にアンケート調査を実施した。この時点では能の実技体験講座は未実施であるため、主に「日本文化史」と特別企画1「能を学ぶ」および2「能を観る」について回答を求めた。アンケートは無記名で行われ、質問に対してあてはまるものに○をつけてもらい（複数回答なし）、自由記述欄も設けた。当日出席者74名中62名（履修登録者の約7割）が回答した。アンケートの回収率は83.8%であった。

なお、各選択肢の百分率は小数点以下第2位を四捨五入した概数である。そのため合計すると100%を超える場合があることをお断りしておく。

2014年度「参加・体験型学習を取り入れた伝統文化教育プログラム」
 受講者アンケート（2014・11・12実施）

1. 「日本文化史A・B」を受講して

(1) 日本の伝統文化に関する知識

1. 大いに増えた	24人 (38.7%)
2. 増えた	38人 (61.3%)
3. 以前とあまり変わらない	0人
4. 講義内容がよく理解できない	0人
5. どちらともいえない	0人

《自由記述》

- ・ 伝統文化について広く学ぶことができた。初めて知る事ばかりで、多くの知識を得ることができた。
- ・ 古典芸能のことは全く知らなかったが、基本的な部分から学べたのでよかった。
- ・ 伝統文化の歴史や舞台の構造などを詳しく聴けたのがよかった。
- ・ 質問に丁寧に答えてもらったのがよかった。
- ・ 映像を見ながら学ぶことができて、たんなる知識で終わらないのがよかった。
- ・ 映像が多くてわかりやすかった。
- ・ 映像を見ながらの解説と、実際に間近で本物の古典芸能に触れることができて、遠い世界の事のように考えていた古典芸能が、ずっと自分の中に違和感なく溶け込んできたように感じた。
- ・ 何も知らない状態で鑑賞していたら、ただ「ストーリーが面白かった」としか思わなかったかもしれないが、伝統芸能の知識をたくさん蓄えたことで、実際に鑑賞した時、違う角度から見ることでできて感動した。
- ・ 何も知らないのに何となく敷居が高いように思っていた。自分の勘違いが払拭された。
- ・ 「古典芸能ってすごい！」と思うようになった。
- ・ 講義を受けて、実際に舞台を鑑賞することで、より理解が深められてよかった。

- ・古典芸能などは自分ではなかなか行くことができないので、授業という形で観ることができてよかった。

(2) 日本の伝統文化に対する興味・関心の度合い

1. 大いに高まった	22人 (35.5%)
2. 高まった	39人 (62.9%)
3. 以前とあまり変わらない	1人 (1.6%)
4. かえって関心が薄くなった	0人
5. 全く興味を失った	0人
6. どちらでもない	0人

《自由記述》

- ・知ることで興味が高まった。
- ・日本文化の奥深さや美しさを知った。
- ・実際の舞台を見てその面白さが体感できた。より興味がわいた。
- ・以前であれば伝統文化に関するテレビなど見ようとも思わなかったが、先日文楽の咲寿大夫さんがNHKに出ていて、つい見入ってしまった。講義を受けて興味関心が高まったと思う。
- ・実際に見る古典芸能は言葉が分からない所があっても引き込まれてしまうほど魅力的だった。
- ・古典芸能の中では特に文楽に興味を持った。
- ・実際に公演を見て、生で見る楽しさや本物のすごさを体感し、興味関心が高まった。
- ・自分でもテレビで能を見たりする機会が増えた。親や友達にも教えていきたい。
- ・自分でもまた観に行きたい。

(3) 講義内容に対する満足度

1. とても満足している	23人 (37.1%)
2. 満足している	38人 (61.3%)
3. 可もなく不可もなし	1人 (1.6%)
4. やや不満	0人
5. とても不満	0人

《自由記述》

- ・とても分かりやすく丁寧だった。
- ・講義はとても中身があり充実しているので毎回とてもためになる。
- ・古典芸能がどのように伝わってきたのか、歴史的なことを教えて頂けてとてもよかった。
- ・「知らなかったこと」がどんどん「知っていること」に変わっていくのが面白かった。
- ・教科書だけでなく映像や写真も多くて分かりやすかった。
- ・映像を見ながら解説してもらえるので注目するポイントが分かってよかった。
- ・観劇前の講義で予習しているので観劇中も内容をしっかり理解することができた。
- ・ビデオなど視覚的な情報が多いので講義を聞いていてわかりやすいし楽しい。
- ・資料が豊富で楽しかった。
- ・映像を見たり、実際に行ってみたりして、すごく世界が広がった。日本の文化にとっても興味を持つことができた。

2. 喜多流能楽師 佐藤寛泰師による特別講義（6月11日、日本文化史A）を受講して

(1) 能に関する知識

- | | |
|------------------|-------------|
| 1. 大いに増えた | 13人 (21.0%) |
| 2. 増えた | 44人 (71.0%) |
| 3. 以前とあまり変わらない | 4人 (6.5%) |
| 4. 講義内容がよく理解できない | 1人 (1.6%) |
| 5. どちらともいえない | 0人 |

《自由記述》

- ・実際の衣装や面を間近で見ることができたのが嬉しかった。
- ・実際に着付けの過程を見ることができたし、実際に声を出して一緒に謡をうたったのもよかった。
- ・能面や衣装の実物を見たり、実際に能をやっている方からお話を聞いたことはとても貴重な経験になった。

- ・衣装を見るのが楽しかった。実際に声を出してみても、いかに難しいかわかった。
- ・以前は名前しか知らなかった能が、実際どういうものであるか、分かってよかった。
- ・発声の仕方や正しい姿勢を知ることができた。
- ・授業で学んだことが多かった（選択肢3「以前とあまり変わらない」回答者）

(2) 能に対する興味・関心の度合い

- | | |
|-----------------|-------------|
| 1. 大いに高まった | 15人 (24.2%) |
| 2. 高まった | 39人 (62.9%) |
| 3. 以前とあまり変わらない | 4人 (6.5%) |
| 4. かえって関心が薄くなった | 0人 |
| 5. 全く興味を失った | 0人 |
| 6. どちらでもない | 0人 |
| 無回答 | 4人 (6.5%) |

《自由記述》

- ・謡を体験できたのがよかった。
- ・実際に公演を見てみたいと思った。
- ・やはり普通の演劇やお芝居に比べ、敷居が高く、難しいと感じた。
(選択肢3「以前とあまり変わらない」回答者)

(3) 講義内容に対する満足度

- | | |
|--------------|-------------|
| 1. とても満足している | 21人 (33.9%) |
| 2. 満足している | 34人 (54.8%) |
| 3. 可もなく不可もなし | 3人 (4.8%) |
| 4. やや不満 | 0人 |
| 5. とても不満 | 0人 |
| 無回答 | 4人 (6.5%) |

《自由記述》

- ・舞台上で使う小物や動きにそれぞれどのような意味があるのか詳しく知ることができてよかった。

- ・最後は時間がなくなって、かなりバタバタしていた感じがする。
(選択肢3「可もなく不可もなし」回答者)

3. 喜多流普及公演「能への誘い」夜の部 (11月10日、レクチャー付き、半能形式) を鑑賞して

(1) 公演内容に対する満足度

- | | |
|--------------|-------------|
| 1. とても満足している | 20人 (32.3%) |
| 2. 満足している | 30人 (48.4%) |
| 3. 可もなく不可もなし | 7人 (11.3%) |
| 4. やや不満 | 1人 (1.6%) |
| 5. とても不満 | 0人 |
| 無回答 | 4人 (6.5%) |

《自由記述》

- ・何もない舞台にシテの表現力と生演奏で様々なものを作り上げるのが素晴らしい!!
- ・衣装の詳細や楽器の事を教えてもらえてとても興味深かった。勉強になった。
- ・解説が分かりやすかった。初心者でも難しく考えずに観ることができた。
- ・まだ能の言葉がよくわからないので、もう少し勉強しなければと感じた。
- ・すでに知っていることばかりで新鮮味に欠けた。全体的に物足りない。(選択肢4「やや不満」回答者)

(2) 能に対する興味・関心の度合い

- | | |
|-----------------|-------------|
| 1. 大いに高まった | 15人 (24.2%) |
| 2. 高まった | 36人 (58.1%) |
| 3. 以前とあまり変わらない | 5人 (8.1%) |
| 4. かえって関心が薄くなった | 1人 (1.6%) |
| 5. 全く興味を失った | 0人 |
| 6. どちらでもない | 1人 (1.6%) |
| 無回答 | 4人 (6.5%) |

《自由記述》

- ・囃子方の楽器紹介がよかった。古典芸能の楽器や音楽に関心を持った。
- ・実際に生で見ることで独特の緊張感が味わえた。
- ・能に問題はない。自分が苦手というだけ。(選択肢6「どちらでもない」回答者)

(3) 来年の2月16日(月)～18日(水)には日本文学科生(全学年)の希望者を対象に「能の実技体験講座」を実施する予定です(3～4時限目、集中講義形式、詳細後日掲示)。さしあたり体験講座を受講するかどうかは別として、あなたも実際に能を体験してみたいと思いますか?

- | | |
|--------------------------|------------|
| 1. ぜひ体験してみたい | 13人(21.0%) |
| 2. できれば体験してみたい | 27人(43.6%) |
| 3. そこまでやりたいとは思わない | 9人(14.5%) |
| 4. 実技には関心がない | 3人(4.8%) |
| 5. 今のところどちらともいえない(わからない) | 5人(8.1%) |
| 無回答 | 5人(8.1%) |

4. 本プログラムへの意見・感想・要望等

《自由記述》

- ・公演前に演目について事前学習できてよかった。全体的にとっても楽しく受講できた。
- ・能、歌舞伎、文楽、1回ずつではなく、もっと見たい。年間通してチケットを販売してほしい。年間の公演スケジュールを一覧表にして貼り出してほしい。
- ・普通に生活していたらあまり知ることのない古典芸能。じっくり勉強してみると、自分が自分の国の芸能をこれほど知らなかったのかと驚いた。その分、蓄積されていく知識が多く、楽しかった。実物を見られたことも本当によかった。
- ・歌舞伎の女形講座があったらぜひ参加してみたい。

(2) アンケート結果に関する考察

i. 「日本文化史」について

前期・後期の「日本文化史」については概ね好評で、「知識」「興味・関心」「満足度」に関する肯定的な評価（知識が「増えた」および「大いに増えた」等）は、ほぼ100%に近い結果が得られた。もともとほとんど知識がなく、まっさらな状態からスタートしているため、講義を受ければ受けるほど知識が増えていくのはある意味当然だが、視聴覚情報も含めて「知る」ことが受講者の興味・関心を喚起し、それまでの「わからない」「堅苦しい」といった先入観がくつつがえされ、「わかる」「楽しい」「おもしろい」に変容していることが如実にうかがえる結果となっている。特に自由記述では生の舞台に接した感動を書き綴っている学生が多く、改めて「本物体験」の重要性や有効性（特に、無意識の先入観や偏見に自ら気付き、これを修正していく「バイアストレーニング」としての有効性）を確認することができた。

とはいいながら、前期・後期、各期末試験の結果を見ると、残念ながら知識の定着度の面では「未だし」の感なきにしもあらず。この点については今後、小テスト（確認テスト）や課題レポートなどを工夫して知識の習得・定着を図り、たんに「おもしろかった」で終わらない、「おもしろい」といってもエンターテインメントではなく、インタレストを刺激し、かつアクティブな学びを促すような授業内容にする必要がある。

ii. 能楽師による特別講義について

次に、プロの能楽師による特別講義では、知識が「増えた」「大いに増えた」が約92%、興味・関心が「高まった」「大いに高まった」が約87%、講義内容に「満足している」「大いに満足している」が約89%と、軒並み高い数値が得られた。中には「授業で学んだことが多かった」、つまり知識の面であまり新鮮さがなかったと回答する者もいたが、大半の受講生はそれでも実演者から直接お話をうかがったり、本物の能面や装束を（映像や画像などではなく）間近に見ることができた点を高く評価している。やはり、どんなに視聴覚教材を駆使しても、「本物に触れる」「じかに接する」という体験があるいはまたその貴重さが、学習者にとって非常に重要なファクターになっていることがうかがえる。

なお、当日の様子を簡略に記述しておく、まず「小面」^{こおもて}「般若」「姥

「十六」など代表的な能面の紹介と解説があった。次に、学生をモデルに装束の解説と着付けの実演が行われた。女性役は花を散らした紅入り唐織の着流し姿（モデル：日文2年生H〇）、男性役は大口袴に太刀を帯び、烏帽子をかぶって長絹ちようけんを片袖脱ぎにした武将姿（モデル：日文2年生M〇）になり、それらのお出で立ちに対して、武将役の学生は「十六」の面を、また女性役の学生は「小面」をつけた。その後、参加者全員で声を出し、祝言曲として名高い謡曲『高砂』の一節を謡った。最後に質問コーナーを設け、様々な質問に答えていただいた。以下はその一例である。

Q「何歳から能を始めたのですか？」

A「2歳からです。代々そういう家系なので」

Q「能楽師として普段から心がけていることは何ですか？」

A「どうしても公演活動が多いので、時間を見つけて自分の稽古をするよう心がけています」

Q「能面をつけて息苦しくないですか？ 演じていて酸欠になりませんか？」

A「面をつけ、10キロの衣装を着て激しい動きをすると、ものすごく体力を消耗します。舞い終ると3～4kg減っています」

Q「海外で公演したことはありますか？」

A「フランスからの依頼で、現地でジャンヌ・ダルクの新作能を上演しました」

学生たちにとっては、こうした質疑応答によって、能がより興味深く感じられ、親近感が増したものと思われる。

以上のような講義内容は、それがいかに初心者向けのレクチャーだったとしても通常の授業で学べる範囲を超えており、必ずしも「授業で学んだことが多かった」ということはない。

なお、今回のアンケート調査は6月の特別講義から5ヶ月後に行なわれたものであり、だいぶ時間が経過している。そこで、特別講義当日の反応・反響・感想がどうだったか、以下に引用しておこう。

- ・プロの能楽師の方のお話には重みがあり、とても勉強になりました。あんな重そうな装束をまとめて舞うのはとても体力がいるだろうなと思いました。実際の舞台が見てみたいです。
- ・なかなか見ることのできない本物の能面を見せてもらったり、衣装の着

付け風景まで見せてもらったり、実際に声を出して「高砂」を謡ったり、とてもいい経験になりました。

- ・能面の扱いがとても丁寧、慎重なのが印象的でした。神聖なものであるということがよくわかりました。
- ・能の実物は何もかもが初めてで、とても新鮮でした。興味を惹かれるものがたくさんあって、ぜひ本物の舞台を観てみたいと思いました。
- ・能では立つのも座るのも姿勢が大事。私も気を付けようと思いました。
- ・能の舞台をつとめると3～4kgもやせると知って、とても大変なんだなと思いました。
- ・佐藤先生の謡に鳥肌が立ちました。感動しました。
- ・謡は難しかった。
- ・佐藤先生の声量に圧倒されました。心まで震えるほどでした。
- ・生で見聞きして能の素晴らしさがより理解できたと思います。特に「声」に感動しました。
- ・佐藤先生の説明がわかりやすく楽しかったです。公演を見に行くのが楽しみです。
- ・他学科からの参加です。とても興味深く聞かせていただきました。このような貴重な機会を得ることができ、本当に感謝の気持ちで一杯です。
- ・能の衣装は動きにくく、肩より上に腕を上げるのも難しく感じました。また面をつけると足もとが見えず、一歩ずつゆっくり歩くことも怖かったです。2月に予定されている能のお稽古が楽しみです。(引用者注…能の装束を実際に体験した学生の感想)
- ・面も本当に視野が狭く、不安になりました。下を見たくても見てはいけない…と、とてもじれったくなりました。貴重な経験をさせていただきました。とても満足しています。ありがとうございました。(同上)

佐藤師の特別講義は、あるいは内容が盛り沢山で、アンケートでも指摘があったように、若干時間不足の感を与えたかもしれない。だが、内容を減らすと企画したいの満足度が低くなる可能性がある。また普通教室の構造上、教壇（ステージに当たる部分）が狭く、演出上困難を生じる面もあるが、なかなか他に適当な教室もない（大学講堂では大きすぎる）ことから、当面これで何とかやりくりするほかはない。現状、ベストの環境とはいえないが、まずは許容範囲かと思われる。

iii. 「能への誘い」公演について

では、通常授業（日本文化史）とプロの能楽師による特別講義を受講して、実際に舞台を観劇した結果はどうだったかということ、今年度の「能への誘い」公演に対する受講生の満足度は「満足」「とても満足」を合わせた肯定的な評価が約81%、興味・関心のほうも「高まった」「大いに高まった」合わせて約82%という結果になっている。この数字から、まずは好評だった、と言っていいだろう。ただ、上記アンケート結果を見ると、受講者の「満足度」と「興味・関心」は完全に連動しており、「日本文化史」ではこれらに対する肯定的評価がほぼ100%に達しているのに対し、6月の特別講義は約9割、11月の「能への誘い」は約8割と、全体としてはいずれも好評、高評価ながら、数値的には漸減傾向を示している。

正直なところ、企画担当者としては意外な結果だったが、これについては必修科目も担当している学科の専任教員による年間30回もの通常授業と、初対面の講師によるたった一度の特別講義、また通常授業のような同時解説のない観劇体験では、いかに初心者向けとはいえ、次第にハードルが高くなり、それにつれて参加者の興味・関心、満足度も漸減していった可能性が考えられる。

ちなみに、歌舞伎や文楽ではこういったリアクションはあまり見られない。元来、大衆芸能であった歌舞伎や文楽に比べ、能は貴族的な文化伝統を色濃く継承しているため、ことば（詞章）を理解する（あるいはそれ以前の問題として「聞き取る」）のが難しく、こういう結果になったのではないかと思われる。その意味でいうと、能はそれだけ「ことば」に依存する、「ことば」重視の舞台芸能だということになる。

以下はアンケート結果ではなく、公演観劇直後の感想である。

- ・能の舞台に引き込まれました。正直、言葉はよくわかりませんでしたが、シテの役者さんの動き（足の遣い方や姿勢など）に興味をわきました。次は言葉がわかるようにしたいです。
- ・言葉はよくわかりませんでしたが、何だか夢中で見ていました。ただ公演を見るだけでなく、いろんな説明があって、知識もつくし、総まとめとして舞台を観るというのはとてもいい構成だと思います。説明もわかりやすく、ユーモアもあって、この人たちは本当に好きでこの世界にいるんだな、ということがわかりました。全部見終わった後、よくわから

ないけれど満足した自分がいました。

- ・能、少し難しかったです。でも、もっと大人になって、もっと知識をつけてからまた観てみたいと思いました（歌舞伎や文楽ではそんなふうには思わなかったのですが）。

これらは比較的肯定的なコメントだが、そういう学生たちであっても、能は「言葉がむずかしかった」「よくわからなかった」と語っている。であればこそ、ことばの難しさが舞台全体の理解を妨げるハードルになったであろう学生たちはもっと多かったに違いない。

その一方、ごく少数だが、「能への誘い」公演に対して「物足りない」という感想を抱く者もあった。たとえば、観劇直後の感想として、

- ・柱はあっても鏡松がなくて残念でした。
- ・座る場所がわるくて（目付柱の方向、しかも前に座った人が背が高かった）、役者さんが完全に隠れてしまい、ほぼ音声のみで楽しみました。

というコメントを寄せた学生たちがいる。後者は席を移動すれば何とか対処のしようがあるが、前者は会場の都合でいかんともしがたい面がある。

能には専用の能舞台というものがあり、能舞台には「能の思想」が凝縮されている。だが、仙台には本格的な能舞台もなければ能楽堂もない。「能への誘い」の会場となった仙台市民会館にしろ、青年文化センターにしろ、公立のいわゆる「多目的ホール」は能を上演する施設としては物足りない。「鏡松」云々というコメントも、実は能のことをある程度学んだからこそ出てくる感想であり、能の「器」（会場・施設・空間）を含め、より本格的な公演に対する期待が大きいということのあらわれといえよう。

さて、上記アンケート結果を総括すると、大半の参加者にとって今回の伝統文化教育プログラムは非常に有効、有益だったと言ってよい。

だがその一方、アンケート調査の当日、教室にいながらアンケートに答えていない学生たちがいる。欠席者はさしあたり脇に置くとして、アンケートに答えていない学生が出席者の1割強（アンケート回収率は83.8%。当日講義に出席しながら回答しなかった人数は74名中12名で全体の16.2%）もいることを思えば、彼らの「無言」がいったい何を意味するのか、いささか気になるところではある。あるいは授業の工夫によって何とかなるのか、ならないのかを含め、今後の課題としたい。

4. 特別企画3「能を体験する」に関するアンケート調査（2015・2・18実施）

(1) アンケート調査の結果

残るは特別企画3「能の実技体験講座」だが、これは講座最終日にアンケート調査を実施（実施日：2015年2月18日）、回答は無記名とし、自由記述欄を設けた。当初申込み人数は22名、講座初日時点の参加者は20名だったが、うち2名が体調不良で欠席、最終日まで参加した18名全員から回答を得た（回収率100%）。

能の実技体験講座については、11月に実施したアンケート調査においてどれくらい参加希望者がいるのか、あらかじめ予備調査を行っていた。その際、「ぜひ体験してみたい」は全体の2割（13人）、「できれば体験してみたい」を含めると40人、合計6割以上もの学生が関心を示していた。その後、12月になって実際に受付を開始したところ、今年度の「日本文化史」受講者（2年生）からは9名の応募があった。これは11月の予備調査で「ぜひ」と回答した人数の7割、全履修登録者（後期86人）からするとほぼ1割に相当する。

一口に「能を学ぶ」といっても、「見る」側と「する」側では意味が異なる。第一、今まで「見る」側だった者が「する」側に立ち位置を変えるということは、普通はなかなかできない。あるいは、そこまでしない（興味・関心があっても、そこまでではない）。だが、適切な導きときっかけさえあれば、「見る」側から「する」側にシフトする決断力や行動力、チャレンジ精神を持っている学生たちは、いる（その率、「日本文化史」でおよそ10人に1人）。今回の伝統文化教育プログラム、特に実技体験講座は、そうした意欲ある学生たちに新たな学びの機会とステージを提供するものとなったといえよう。

なお付け加えれば、6月の「能を学ぶ」において学生モデル（2名枠）に応募してきた2年生は4人いたが、その全員が2月の体験講座にも参加して意欲のあるところを見せた。その他の参加者では「日本文化史」過年度履修者（3年生）が3名おり、実技体験講座における「日本文化史」の受講者割合（つまり、ある程度の知識や理解があって実技講座に参加した学生の割合）は全体の2/3、残る1/3（6名）はまだ「日本文化史」を受講していない1年生であった。ある意味、今回参加してくれた1年生たちは、最も

果敢なチャレンジャーであったということが出来るかもしれない。

2014年度「参加・体験型学習を取り入れた伝統文化教育プログラム」
「能の実技体験講座」受講者アンケート（2015・2・18実施）

(1) 講座内容に対する満足度

- | | |
|-------------------------------|---------------|
| 1. たいへん満足した（もっとやりたい／やりたかった） | 18人
(100%) |
| 2. それなりに満足した（もう少しやりたい／やりたかった） | 0人 |
| 3. ちょっと不満（あまり面白くなかった） | 0人 |
| 4. とても不満（つまらなかった） | 0人 |
| 5. その他 | 0人 |

(2) あなた自身の取り組み（意欲・充実度）

- | | |
|-------------------|------------|
| 1. とても意欲的に取り組めた | 18人 (100%) |
| 2. それなりに充実した講座だった | 0人 |
| 3. あまり意欲がわかなかった | 0人 |
| 4. 全くやる気が出なかった | 0人 |
| 5. その他 | 0人 |

(3) 実技講座の開講形態と開講時期に関する希望

（注：複数回答あり、以下のべ人数21人で百分率を表示）

- | | |
|--------------------------|-------------|
| 1. 連講形式（今回のような時期＝学年末）がよい | 12人 (57.1%) |
| 2. 連講形式（夏休み）がよい | 5人 (23.8%) |
| 3. 通常学期中（前期・週1程度）がよい | 2人 (9.5%) |
| 4. 通常学期中（後期・週1程度）がよい | 1人 (4.8%) |
| 5. その他（いつでもよい） | 1人 (4.8%) |

(4) 実技講座の日数と回数に関する希望

- | | |
|-------------------|------------|
| 1. 3日（6コマ）程度がよい | 8人 (44.4%) |
| 2. 5日（10コマ）程度がよい | 6人 (33.3%) |
| 3. 2週間（20コマ）程度がよい | 3人 (16.7%) |
| 4. その他（4日程度がよい） | 1人 (5.6%) |

(5) 能に対する興味・関心の度合い

- | | |
|-----------------|-------------|
| 1. 大いに高まった | 12人 (66.7%) |
| 2. 高まった | 5人 (27.8%) |
| 3. 以前とあまり変わらない | 1人 (5.6%) |
| 4. かえって関心が薄くなった | 0人 |
| 5. 全く興味を失った | 0人 |
| 6. どちらでもない | 0人 |

(6) また能の体験講座があれば参加してみたいと思いますか？

- | | |
|---------------------------|-------------|
| 1. ぜひ体験してみたい | 12人 (66.7%) |
| 2. できれば体験してみたい | 6人 (33.3%) |
| 3. そこまでやりたいとは思わない | 0人 |
| 4. 実技には関心がない | 0人 |
| 5. 今のところどちらともいえない (わからない) | 0人 |

(7) 能以外で「こういう体験講座があれば参加してみたい」という希望・要望があれば、自由に書いてください。

《自由記述》

- | | |
|-----------------------|----|
| ・着物の着付け | 6人 |
| ・歌舞伎 | 3人 |
| ・狂言 | 3人 |
| ・邦楽器 (三味線、琴、太鼓・鼓・笛など) | 2人 |
| ・能 (実際に衣装を着けての体験講座) | 1人 |
| ・日舞 | 1人 |
| ・茶道 | 1人 |

(8) 今回の実技体験講座の感想、講師の先生方へのメッセージ、また今回受講しなかった人たちに対するメッセージなどがあれば、自由に書いてください。

《自由記述》

- ・思っていたより動きが激しく、手足が思うように動かなかったりしましたが、とても楽しかったです。普段はなかなかできないことをさせていただき、貴重な体験をさせていただきました。ありがとうございました。

- ・ 実際体験することによって、声の出し方、動き方を学ぶことができました。またこのような機会があったらぜひ参加したいです。
- ・ 充実した時間を過ごすことができました。ありがとうございました。
- ・ とても楽しく能を学ぶことができました。先生にはお忙しいなか本当にありがとうございました。
- ・ 実際に体験してみることで、能の難しさも楽しさも味わえて、本当に充実した時間を過ごすことができました。
- ・ 理解するのに時間がかかりましたが、丁寧に教えて下さり、ありがとうございました！ 本当に参加してよかったと思います。
- ・ 大変興味深い体験をすることができました。背筋が伸びました。来年の開講も期待しています。ありがとうございました。
- ・ 正座しっぱなしで足がしびれました。
- ・ 最初はとても不安でしたが、やっていくにつれてとても楽しく受けることができました。日常でも姿勢を正すことを心掛けたいと思います。

(2) アンケート結果に関する考察

能の実技体験講座は2015年の2月16日から18日まで、3日間、計6コマの集中講義形式で行われた。こうした実技講座は、戦前の宮城高等女学校国語科（専攻科）以来70年以上の歴史を有する日本文学科史上初の試み…かどうかは定かではないが、少なくともここ20年ほどは行なったことがなく、学生たちにとってもたいへん貴重な経験になるであろうということで、今回は「日本文化史」受講者以外にも参加者を広く募った。1年生から3年生まで総勢20名（当初申込みは22名）でスタートした実技講座は、参加者を二班に分け、一方は仕舞の稽古（指導：佐藤寛泰師）、もう一方は謡の稽古（指導：喜多流仙台喜章会・鈴木敏彦氏）という形で進行した。

実技講座に参加した学生たちは、そもそも能（あるいは演技・身体表現等）に対する興味・関心が高いグループと想像されるが、アンケートの結果を見ても参加者全員が講座内容に対する満足度と各自の意欲・充実度に最高評価を与えている。わずか3日間とはいえ、最後までやり遂げた学生たちには相当の達成感があったものと思われる。

またこのグループは、生まれて初めて謡や仕舞を体験することで、これまで以上に能に対する興味・関心が高まった、次にこのような講座があればま

た体験してみたい、と回答している（ほぼ100%）。しかも、「大いに」「ぜひ」と回答している人が参加者の2/3を占めている。これは、たとえば11月のアンケート結果などとは明らかに傾向が異なっている。

11月のアンケートでは「日本文化史」を受講したほぼ全員が日本の伝統文化に対する興味・関心が「高まった」と回答しているが、その内訳は「高まった」が2/3、「大いに高まった」が1/3であった。不特定多数を対象とするアンケート調査では、おそらくこうした分布傾向（いわゆる正規分布）が一般的かと思われる。これに対し、実技体験参加者ではその比率が見事に逆転し、プラス側に大きな偏りが生じている。

一般に、取り組みへの達成感や充実感がさらなる意欲の源となり、学びの動機付けを強化することはよく知られているが、学習テーマに対する理解・興味・関心・意欲の高い学生たちの場合、学べば学ぶほど学びの動機付けがより一層強化される傾向のあることが確認されている。^{*7} 実技講座の参加者は、興味も関心も様々な不特定多数…とはとうてい言えず、むしろ伝統文化にプラスの指向性を有する特定少数というべきグループであるところから、このような大きな偏りが生じたものと理解される。

なお興味深いのは、実技講座の受講者のうち、能に対する興味・関心が「大いに高まった」、次も「ぜひ参加してみたい」と回答している2/3がいったいどういう学生たちか、残る1/3の学生たちとの違いはどこにあるか、という点である。

可能性として考えられるのは「日本文化史」の受講歴である。先に見たように、実技体験講座における「日本文化史」の受講者割合は全体の2/3（2～3年生）、残る1/3はまだ「日本文化史」を受講していない学生たち（1年生）であった。今回のアンケート調査では回答者に「日本文化史」の受講の有無を確認する質問項目が欠けているので、たいへん意欲的な回答を寄せてくれた2/3の学生たちが「日本文化史」とどのような関連性があるのか必ずしも定かではないが、参加者の「日本文化史」受講割合と、これも先に指摘した、知識が学びに対する興味や関心を牽引する「知識（原因）→興味・関心・意欲（結果）」の因果モデルなどからすると、今回「大いに」「ぜひ」と回答した12名（全体の2/3）が「日本文化史」の受講者で、すでに古典芸能について一定の知識を有し、実際に舞台を観劇したこともある12名だったとすれば、これは非常に納得できる結果といえる。

以上は現時点で仮説・想像の域を出ないが、仮にもしそうだとすると、実技体験講座の参加者全員が基本的に「意欲的な学生」たちであることを認めた上で、やはり両者を分けるのは知的な領域での学びの有無、あるいは程度であろうと思われる。

これまで述べてきたように、ただたんに知識を学ぶ（知る）だけでは十分とは言えず、さりとて十分な知識もなく、いきなり映像や実物を見る／見せるというのも決して得策とは言えない。学習内容の理解と定着を図るためには、「百聞」と「一見」は「如かず」でつながる（あるいは対比される）のではなく、「百聞」と「一見」を相互補完的に配置しつつ、「百聞」しかして「一見」という順序で学習過程をデザインするのがよい。それと同様に、いかに体験・実践（学習）が重要だとしても、ただ体験すればいい、経験すればいい、というものでもない。むしろ、先入観を相対化し、実際の体験や経験を言語化する知的基盤を持っていることがより効果的、かつ持続可能な学びを担保すると考えるべきであろう。

これを大まかにいうと、プログラム全体の流れとしては「学ぶ」→「見る」→「体験する」、あるいは「知る」→「見る」→「する」というふうに順を追って段階的に学習することが重要である。

なお、今回のアンケートの結果、実技・実習をメインとする体験講座は通常授業より連講形式での実施を希望する者が大半を占めた（実人数合計14人、参加者の77.8%）。たしかに、理屈ではなく身体に覚えさせる類の、それこそ「慣れる」「身をもって学ぶ」スタイルの学習は、正直言って週1回のペースでは身につかないし、追いつかない。

実技講座に関しては、今後も時間に余裕のある春休みなど、ある程度集中して取り組むことのできる環境や条件を用意する予定だが、これもまた「百聞」と「一見」に通じるところがあって、抽象的な言語活動を主とする知的学習と、実技・実習・実体験を主とする身体的な学習とでは、プログラムに緩急、強弱、減り張りをつけたほうが効果的であると思われる。

おわりに

2006年12月に改正施行された教育基本法は、第2条「教育の目標」第5項において、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養

うこと。」と明記し、グローバル化社会における人材育成に日本の歴史や伝統、文化に関する教育の充実が不可欠という姿勢を明確に打ち出した。^{*8}

これにより、新学習指導要領下の教育現場では、古文や漢文の音読など古典に親しむ学習（国語）、国の文化遺産や地域の歴史に関する学習（社会）、民謡・和太鼓・三味線・箏・尺八など邦楽の学習（音楽）、武道の必修化（保健体育）、地域の食文化や和服に関する学習（技術・家庭）、茶道・華道・能楽・文楽・歌舞伎・地域の郷土芸能等、伝統文化の学習（総合的な学習の時間）等、様々な取り組みが実施、推奨されている。^{*9}

改正教育基本法の政治的、歴史的意義についてはさまざまな立場から議論があるようだが、今や全国的にも希少な存在となりつつある「日本文学科」において古典文学や伝統文化の教育・研究に携わっている立場からすると、歴史・伝統・文化に対する教育を重視する、という教育基本法の趣旨に異を唱えるべき理由は全くない。

また、文化庁は「地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを『日本遺産（Japan Heritage）』に認定、これらを「国内外に戦略的に発信することにより、地域の活性化を図る」として、水戸市・足利市等「近世日本の教育遺産群」をはじめとする全国各地18件を2015年度の「日本遺産」として選定、公表した。^{*10}

こうした流れを作ったのはユネスコの「無形文化遺産の保護に関する条約」、通称「無形文化遺産保護条約」である。条約そのものは2003年にユネスコ総会で採択され、日本は翌2004年に締結している。締結国が一定数に達し、条約が発効したのは2006年だが、ユネスコではそれに先立って「人類の口承及び無形遺産の傑作の宣言」を行ない、2001年の第1回宣言において、まず能楽が、2003年に文楽が、2005年に歌舞伎が、それぞれ無形文化遺産の「傑作」として認定されている（条約発効後、これらも無形文化遺産リストに登録された）。

以来、国内でも歴史や伝統文化に対する関心はつとに高まっており、近いところでは2013年に日本人の伝統的な食文化としての「和食」が、また2014年には細川紙・本美濃和紙に石州和紙（すでに2009年無形文化遺産登録）を加えた日本の手漉き和紙の技術が無形文化遺産に登録され、注目を集めた。

日本の伝統文化やそれを作り出すワザが世界的に認められるというのはたいへん喜ばしく、誇らしいことだが、ただ勘違いしてはならないのは、これ

はコンテストでも品評会でもない、ということである。この条約はその名の通り「保護」に関する条約であり、その本来の趣旨は、それぞれの国や地域で育まれてきた固くかつ多様な無形文化、だが無形であるがゆえに放っておけば失われてしまうであろう伝統的な文化を、改めて人類共通の財産（文化遺産）として位置づけ直し、これを後世に守り伝えていこう、というところにある。

形作られたモノ（結果としての有形物）ではなく、それを作り出すワザ（技能）そのものを後世に伝えていくためには、ワザの担い手や後継者の保護・育成はもちろんのこと、そのワザを、またそのワザによって作りだされるモノを必要とする人々（その文化的な価値の理解者や支援者）を育てていく必要がある。だからこそ無形文化遺産条約は、その第14条において「一般公衆、特に若年層を対象とした教育、意識の向上及び広報」に努めるべきことを条約締結国に求めている。^{*11}

こうした国内外の流れを受けて、今後、公教育の領域では伝統文化教育がいつそう重視されることになるだろう。問題は、そもそも歴史や伝統あるいは伝統的な文化に接する機会の少ない児童・生徒・学生たちに対し、いかなるアプローチが可能か（あるいは効果的か）ということだが、それ以上に大事なことは、まず何よりも伝統文化に理解・関心・造詣の深い教員（次世代の教育に携わる人材）を育成することである。

この点について、ある学生は次のように述べている。

- ・日本文化史を受講して、能と狂言の精神性と芸術性はとても魅力的で、それは現代の私たちにも共通して流れていると感じられた。だが、この授業を受講してもっとも衝撃的だったのは、私自身にこうした伝統芸能の知識が全くなかったに等しいということだった。それだけ関心がなかったのだ。また、中学校で能のことを一度学んだはずなのに、今回文化史を通じてわかったような面白さがまったく伝わってこなかったことにも、教職を取っている者として、とても驚いた。これは先生じたいが能にあまり親しんでいないために学習も中途半端になり、能の面白さが伝えきれていないのではないかと思う。

本学科にはこれまで数多の中・高教員を輩出してきた実績がある。また、ここには日本語教育を学んでいる学生たちもいる。であればこそ、ほかならぬ日本文学科の専門教育において古典や伝統文化に対する理解を深めておく

ことは、たんに日本人としての教養や常識を身につけるといだけでなく*12、学生たちが将来、国内外を問わず、教育現場に立った時（むろん、「学校」ばかりが「教育現場」ではない）、必ずや豊かな実りをもたらしてくれるに違いない。

ちなみに、「日本文化史」では能・狂言から歌舞伎、文楽まで、日本の三大古典芸能を学習しているが、これらを一通り学んだ後で「外国人におススメの古典芸能は何か？」と尋ねたところ、81人中41人（50.6%）が歌舞伎をあげた。次が文楽で27人（33.3%）、ついで狂言が8人（9.9%）、能を挙げたのはわずか5人（6.2%）にすぎなかった。

能は日本人でもわかりにくい。まして外国人が理解できるはずがない。普通はそう考える。だが、上述の問いに対して能を選んだ学生は、あえて能を選んだ理由を次のように述べている。

- ・日本に関心を持っている外国人の方には最初に能を見てもらいたと思います。能には古き良き日本人の精神や心情が非常によくあらわれていると思います。死者の悲しみや憎しみに触れることで、日本人の心や気持ち、その根底にあるものを理解することができます。それには能が一番で、これは外せないと思います。

外国人に日本文化を理解してもらうために能を勧めたい、そう考える学生はごく少数だった。だが、そうした人数や割合などは大した問題ではない。大事なことは、学生たちが（たとえば）能をそういうものとして理解し、それをこのように自分の言葉として語るようになった、ということである。

- ・以前は伝統芸能＝古いというイメージを抱いていたが、ただたんに古いのではなく、長年受け継がれてきた芸の重みがあるのだということがわかった。
- ・予備知識を得てから見るとちゃんと話もわかるし、役者さんたちの表現一つ一つに目を向けることができました。歌舞伎も言葉のわからないところはあったけれど、そんなことは関係なく感動できました。少し知識を得ただけで自分の価値観が大きく変わりました。

学生たちは講義のたびに毎回熱心にコメントを書いてくれる。年度末には改めて1年間の振り返りを行うが、それらを読むと、学生たちは「日本文化史」を軸とした「参加・体験型の伝統文化教育プログラム」を通して、それぞれに自分自身の「先入観の壁」に気付き、伝統文化の「古さ」や「難し

さ」の意味を捉え直すことに成功しているようだ。もちろん彼らが受講後に感じる「難しさ」もある。だがそれは、自分たちに理解できない「難しさ」ではなく、ある程度対象を理解したからこそ見えてくる「難しさ」であり、むしろ安易な理解を拒む「奥深さ」である。それは対象への敬意、尊敬、リスペクトをもった理解（共感的理解、肯定的理解）に通じ、結果として日本人としての自己肯定感や自尊感情を高めることにつながっている。

こうした取り組みが日本の伝統文化を支えていく一方の担い手（理解者・支援者）を育成することを願いつつ、学生たちにより充実した学びの場を提供できるよう、今後もプログラムや運営上の見直しなどを行っていきたい。

【付記】 本稿で述べてきたような教育上の取り組みは、2014年度の受講者はもちろんのこと、卒業生を含む歴代受講者たちとの共同作業の結果であり、成果である。この場をお借りして、彼女たちに感謝の意を表したい。

【注】

- * 1 「日本文化史」は2016年度のカリキュラム改訂によって必修化される予定である。
- * 2 このコメントは学年末の感想。以下、本稿における学生の感想やコメントはすべて2014年度の受講者のものである。
- * 3 公益社団法人全国公立文化施設協会の統一企画。現在は東コース、西コース、中央コースの3コースで歌舞伎の巡業が行われている。
- * 4 なお、学外での観劇は参加者に一定の費用負担が発生するため、その点はあらかじめシラバスに明記してある。また年度初めの授業において、日程や費用の詳細を必ず説明することになっている。
- * 5 津村俊充『『百聞一見に如かず』ってほんとう？』（南山短期大学人間関係研究センター紀要『人間関係』第11号、1994・3）
- * 6 黒岩督・仲谷博視「認知的動機づけが知的興味と学習成果に及ぼす効果—「ルール・事例・例外」構造を持つ教材による検討—」（兵庫教育大学学校教育研究センター紀要『学校教育学研究』24、2012・2）。なお、引用文中の「麻柄（1999）」は麻柄啓一「子どもの疑問から授

業を始めればよいのか」（授業を考える教育心理学者の会編『いじめられた知識からのメッセージ—ホントは知識が「興味・関心・意欲」を生み出す』北大路書房、1999・9）、「岩城（1998）」は岩城孝次「知的好奇心をはぐくむ学校」（東京都立教育研究所編『教育じほう』604、1998・5）を指す。黒岩・仲谷が麻柄らの提唱する知識先行の学習モデルを支持する立場にあることは言うまでもない。

- * 7 扇澤美千子・川端博子・山口香・薩本弥生・斉藤秀子「ゆかたの着装から伝統文化の理解へと導く授業実践の試み」（『埼玉大学紀要（教育学部）』63-2、2014・9）でも、学びのテーマに対する「理解・関心が高い者は今後の練習へも前向きな姿勢を示す傾向が認められた。」との報告がある。
- * 8 文部科学省も「わが国の伝統と文化を基盤として国際社会を生きる日本人」の育成を目指すとしている。文部科学省HP「あたらしい教育基本法について」参照。
http://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/houan.htm
- * 9 国立教育政策研究所・教育課程研究センター「伝統文化教育実践研究（平成22・23年度指定）」成果報告書
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidou/list/dentou_122-23.pdf
- * 10 文化庁「『日本遺産（Japan Heritage）』の認定結果及びロゴマークの発表について」（2015年4月24日）
http://www.bunka.go.jp/ima/press_release/pdf/2015042401.pdf
- * 11 「無形文化遺産の保護に関する条約」第14条「教育、意識の向上及び能力形成」（a）（i）参照。
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/treaty/pdfs/B-H18-0006.pdf>
- * 12 それはそれでとても大切なことだし、それじたい無形文化遺産保護条約が求めている「若年層を対象とした教育」にほかならない。